

特集

紅花と「のこぎり商い」

——豪農の商業文書—— 岩田浩太郎

一、史料の宝庫

五月一日、蔵王山麓に近い山形市の小白川キャンパスにNHK学園の古文書講座の受講生四二名のみなさんがスタッフの方々とともに来られた。山形大学附属博物館・附属図書館が共同してスクーリングを受け入れ、両館の近世古文書を閲覧していただいた。

両館には未整理分をあわせると合計一〇万点を軽く上回る古文書が所蔵されている。一九五〇年代以降、両館の古文書は東北近世史研究の宝庫として研究者にひろく活用されている。江戸時代に紅花生産地帯として発展した羽州村山地方の近世古文書が多数所蔵されており、質量ともに日本一の紅花関係史料群といえる。図書館では複数の京都紅花問屋文書も収集しており、生産地から消費地までの紅花流通の実態が追跡できる。山形大学所蔵の近世古文書のこうした性格をふまえて、スクーリングでは豪農稲村家文書と京都紅花問屋伊勢屋文書をそれぞれ二〇点ほど展示し、みなさんに閲覧・解読していただいた。また、「のこぎり商い」を実施した村山地方の紅花商人の商業取引について話させていただいた。

二、紅花仕切状

△稲村七郎左衛門家は、羽州村山郡大蔵村（現山辺町大字大蔵）の名主をつとめた豪農である。白鷹丘陵の中山間地域に位置する大蔵に現在も残る稲村家は、その長屋門や石垣から往時を偲ぶことができる。文政三年（一八二〇）の土地所持高は村内外で合計四二六石であり、村山郡と置賜郡の商品流通の中継点という地の利を活かして、白鷹丘陵や村山盆地西部・置賜盆地北部を対象として手広く地主経営や商業・金融業をおこなった。

山形大学附属博物館所蔵の稲村家文書は一三五八点ある。同家は江戸後期に、商業だけをとりあげても紅花を京・大坂へ、青芋を奈良・越中高岡・越後小千谷などへ、蠟を仙台・江戸へ、漆を会津へ、それぞれ販売する多角的な活動をおこなっていた。一点の文書はこれらの商業活動のなかの一部の取引関係をあきらかにするものにすぎない。膨大な文書解読を重ね、その成果を体系的につなげて、ようやく同家の活動の全体像があらかになる。根気がいる地道な作業である。

史料は、寛延三年（一七五〇）に京都紅花問屋である松任屋徳兵衛が稲村家に宛てた紅花仕切状である。稲村家より送られてきた最上紅花一駄六袋は松任屋の仲介により西陣機業の紅染職人に売却され、その代金四一兩二分・銀三匁七分九厘が松任屋より近江屋惣左衛門に渡された。近江屋は当時、稲村家の支配人を務めていた商人で、在京して稲村家の紅花の売り付け交渉と代金回収



「紅花仕切状」稲村家文書 山形大学附属博物館所蔵

【解読文】

仕切
一金四拾壹兩貳歩 但現金三拾八兩替
銀三匁七分九厘 最上紅花壹駄六袋
右之通相対を以売買仕、代金不残近江屋惣左衛門殿
相渡無出入相済申候、若算用違拔袋等御座候者互指引可申候、
寛延三歳生三月二日 松任屋 徳兵衛
稲村七郎右衛門殿
近江屋惣左衛門殿

を担当していた。宛先に近江屋が連記されているのは、この事情による。松任屋は紅花の荷数・代金額・代金の引き渡しについて稲村家に報告し、もし計算違いや抜袋により実際の荷数が異なっていたなどの場合は、後日に計算し直し差引決算をするという誓約していることがわかる。

さらに史料を子細にみていくと、いろいろなことがわかる。△印は稲村家の屋印であり、この紅花の荷主が稲村家であることを示している。その下の分印は山形城下十日町の村居清七家の屋印であり、この紅花は村居家が稲村家の仲買として集荷したものであることが判明する（その脇の天印は集荷場所の地名か銘柄を示

すものと思われる）。「但現金三拾八兩替」とは、仕切書面の紅花代金額の計算の根拠を示したものである。この紅花は、西陣の紅染職人に販売して得た代金から、売り付けの仲介をした紅花問屋松任屋が受け取る手数料（通常は代金の一％）を差し引いた、残りの代金（これを手取金・現金と呼んだ。すなわち、稲村家が取得する金額）が一駄（＝六四袋）あたり三八兩となる相場で売られたことを示している。この紅花の荷数は一駄六袋（＝七〇袋）であるので、 $38 \times (70 + 64)$ の計算で仕切書面の金額が得られる。このように仕切の記載様式をふまえて解読すると、一枚の短い仕切から、紅花取引をめぐる様々な関係とその情報が引き出せるといえる。

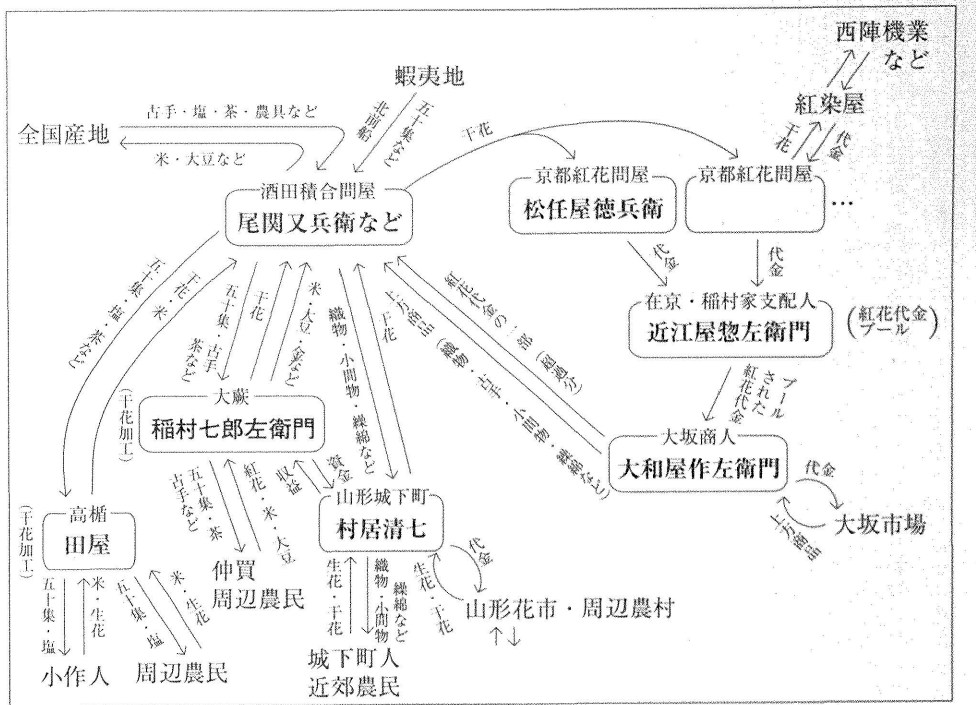


図 稲村家の紅花商業ネットワーク (18世紀後半)

三、全国的な商業システム

図は、一八世紀後半の稲村家の様々な商業ネットワークのうち、紅花取引に関わる局面に限定して復元したものである。詳細は図

儲けることから一般に「のこぎり商い」と呼ばれる。

四、複合的な「のこぎり商い」

さらに注目される点をみよう。図に示したが、この時期、支配人(近江屋)にプールされた紅花代金は、大和屋による上方商品購入の代金に全部宛てずに、一部(超過分)は酒田問屋へ送金された。酒田問屋は、稲村家からの米・大豆を酒田市場で売却した代金をプールしていたが、さらにこの京都からの資金をプラスして、北前船が運んできた全国商品を稲村家の指示を受けながら買い付けた。蝦夷地(北海道)からの五十集物(海産物。多くは塩物・干物)、全国特産地からの塩・茶、農具・古手(古着)が主な商品である。すなわち、稲村家は酒田との取引で、行き荷は米・大豆、帰り荷は全国商品で儲けるといふ「のこぎり商い」を実施していたのである。そして、上方との「のこぎり商い」と酒田との「のこぎり商い」が別々ではなく資金回転の面で結びついた形で行われていたことが注目される。紅花代金のうち、上方商品の購入代金に宛てる額と酒田問屋へ送金する額の比率を調節することで、上方・酒田の各市場で買い付ける商品の量をそれぞれ増減させることができる商業システムといえる。この取引関係を形成することで、稲村家をはじめ村山地方の豪農や商人は相場変動をもにらみながら、上方商品のみならず全国物資を適宜選択し、多品種にわたって必要な量を仕入れることができた。需給関係の変化に対応するための巧妙な、合理的な商法といえる。

稲村家は、上方や酒田市場から仕入れた商品のうち、高級織物や小間物などの奢侈品は主に山形城下町へ、五十集物や塩は主に周辺農村へ送り売り捌いた。城下町などの都市部の需要と郡村部

に譲るが、基本的な部分について概説しよう。稲村家が紅花を周辺の生産者・小作人や仲買人から集荷し上方へ出荷するポイントには三つあった。①稲村家、②田屋(小作地管理人のこと。分家や家来百姓がなった)、③山形城下町商人の村居家、である。②は高橋(山辺町)や長崎(中山町)などに置かれ、周辺農村から集荷した大量の生花(摘んだ花弁)を多数の小作人を使って干花(花餅)に加工し出荷するセンターとして機能した。③は稲村家より融通された資金を使って山形城下町や周辺農村から紅花を集荷した。①③で集荷・加工した紅花は、荷印を付けて荷造りされ、最上川を下って酒田湊の間屋(尾関家など)を経由し、通称「北廻り」のルート(酒田―敦賀―塩津―大津―京)を使って京都紅花問屋へ出荷された。また、①②が周辺農村から集荷した米・大豆は酒田の間屋へ出荷され、尾関家らを通じて酒田市場で売却された。そして、複数の京都紅花問屋の仲介により西陣機業の紅染職人に売却された空印紅花の代金は在京の近江屋など稲村家の支配人をつとめた商人により回収されプールされた。近江屋は稲村家より書簡で指示を受け、全国物資が集まる大坂の商人(大和屋など)へ資金(プールしていた紅花代金)を渡し、大和屋は稲村家より指示された上方商品(古手・織物・練綿・砂糖・蚊屋・小間物・雛人形など)を仕入れ、大坂から京を経由し「北廻り」を逆にたどって酒田問屋まで送った。そして、酒田問屋の蔵に一時保管され稲村家の指示を待ち逐次最上川をのぼされた上方商品は、先の①③に送られ、それぞれの周辺住民である百姓・町人に販売されたのである。行き荷は紅花、帰り荷は上方商品で儲ける商法であり、村山地方の紅花商人にひろくみられる。こうした商法は、押すと引くとを交互にする鋸のように商品を行き帰らせて

の需要の違いをふまえた販売をめざしたといえる。都市部の販売は③の村居家が担当した。稲村家の小作人たちは同家や②の田屋より塩や五十集物、古手や茶を購入し、家族の衣食を充たした。蛋白源となる五十集物や塩は、生産労働をおこなう小作人の体力維持に不可欠の食品であり、豪農の商業経営が地主経営と密接に結びついておこなわれた様相があきらかとなる。稲村家は紅花のほか、青苔・蠟・漆なども上方や江戸・仙台に出荷していたが、それぞれに「のこぎり商い」のネットワークを張り巡らし、かつそれらの「のこぎり商い」は相互に資金回転などの面で連結させるといふ、極めて高度で複雑な商業活動を展開していた。こうした全体的な見取り図を描きながら、一点一点の解説を進め、その成果により見取り図を修正しより精緻なものにしていく作業は、古文書学習の醍醐味に結果すると思われる。

スクーリングでは、稲村家文書のなかから「のこぎり商い」の各局面に関する文書を多数展示した。また、京都の側からも紅花取引の意義があらかになるように、山形大学附属図書館所蔵の京都紅花問屋伊勢屋源助家文書をあわせて公開し、受講生の方々に読んでいただいた。

【参考文献】岩田浩太郎「紅花の道」(井ヶ田良治ほか編『歴史の道・再発見』第1巻、フォーラムA、一九九四年)

横山昭男編『街道の日本史II 最上川と羽州浜街道』吉川弘文館、二〇〇一年

岩田浩太郎「紅花商業と東北」(『山形大学公開講座

山形の魅力再発見 報告集』山形大学都市地域学

研究所・山形県生涯学習文化財団、二〇〇三年

(いわた こうたろう 山形大学人文学部)